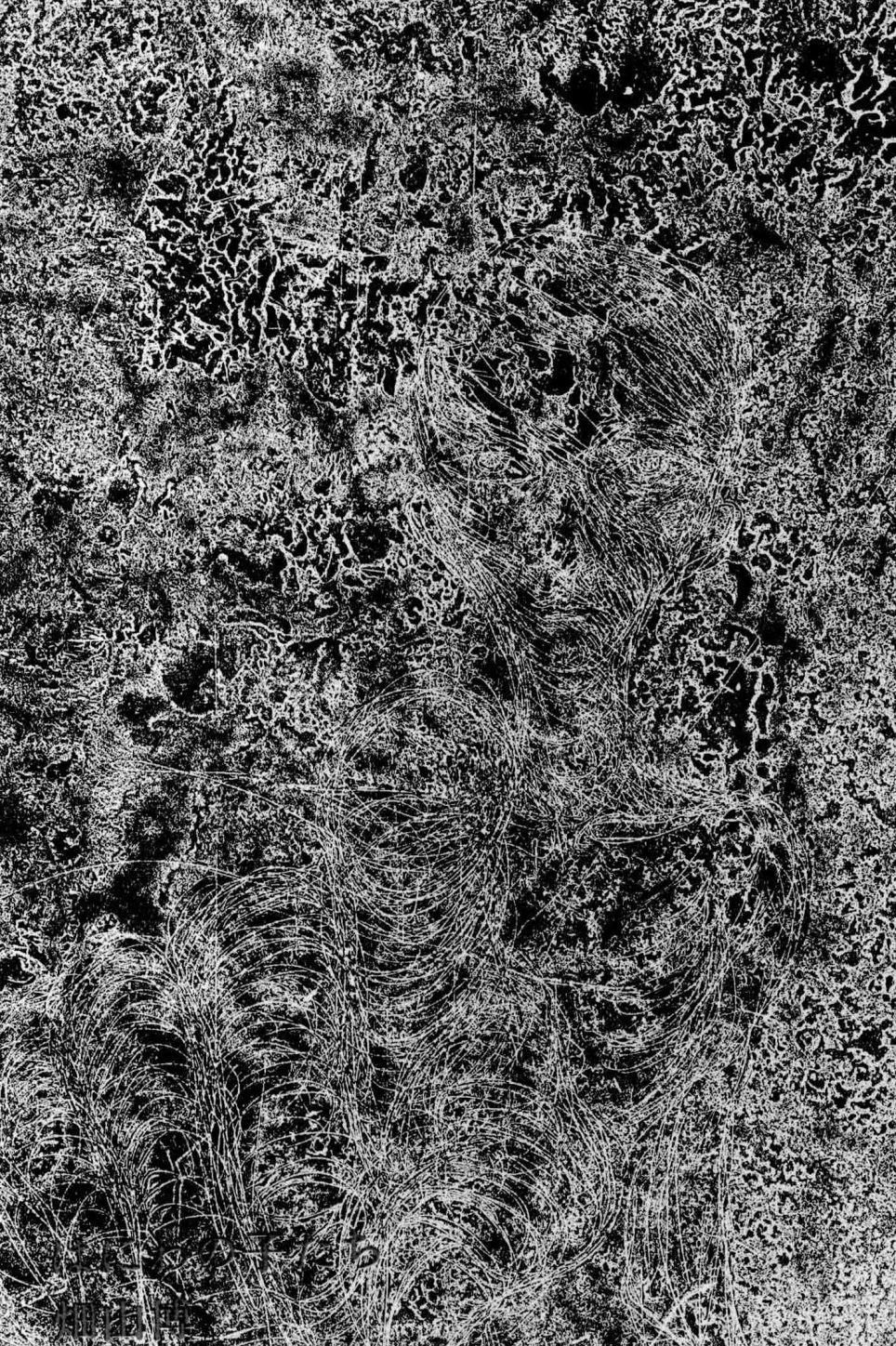
畑山博 はこわの子た



著者略歴
昭和10年、東京に生れる
収録作「いつか汽笛を鳴らして」にて第67回芥川賞受賞
〈現住所〉 平塚市岡崎6270-68（〒259-12）

はにわの子たち
一九七二年四月十五日 第一刷
一九七八年五月 十日 第四刷
定価 九五〇円
著者 畑山博
発行者 樫原雅春
発行所 株式会社 文藝春秋
〒102 東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五局一二一一
印刷 凸版印刷
製本 中島製本
万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

© 1972 Hiroshi Hatayama Printed in Japan

〈はにわの子たち〉目次

けものが撃たれるとき　5
こま　69
はにわの子たち　89
いつか汽笛を鳴らして　151
あとがき　248

樊晌 司 修

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はにわの子たち

けものが撃たれるとき

「どうして電話器なんか盗む気になったんだね」
ぼくは口を結んで答えなかった。
「答えたくなければ、答えなくたっていいんだけどね。ここは警察とは違うんだから……」
スーパーバイザーの四万は、太い首をすくめ、わざとのように笑い顔をつくり、周りにいる更生友の会の女性会員たちをふり返った。
「……それなら、話題を変えて、北海道のことやおふくろさんのことを話してもらおうかねえ」
「喋りゃしないよ、そんなこと。ばかばかしい」
つま先がむれて熱くなってきた。ぼくは、長靴の先を石油ストーブから引っ込め、壁ぎわへ椅子をずらせた。
「亡くなったおふくろさんのことも喋りたくないって言うのは、どういう理由でかな」

たぶんぼくの調書の写しか何かなのだろう。四万は、膝の上で二つ折りにした紙を覗き込みながら言った。

「だって、せいちゃんと、あんた等と、どういう関係があるって言うんだよ」

四万の色白のよく動く喉仏に、でっかい注射針でも刺してやったらどうだろう。思いきり沢山、下水の水を流し込んでやったらどうだろう。四万は、縁の太い眼鏡を外して指の背でこすり始めた。

クリーム色の壁の向う側から、酸素ボンベを転がす音が響いてくる。アセチレンの炎で厚い鉄板を焼き切るシュルッシュルッという音が、断続しながらその音を追いかけている。

もしかすると工員たちの休憩室にでもなっているのかもしれない。書類のほとんどのっていない机一つ、電話一つ、ドアに近い壁面に黒板が一つ立てかけてある他には、部屋の中には何の装飾も無い。

品川地区第××回例会

議題

保護観察ケース棚橋清志君

歓迎

ケースという字までは一度消してある。が、消し方がいいかげんなので、視力の弱いぼくにもはっきりと判読できる。中学一年のとき英語教師から殴られて右の視神経を切って以来、十秒と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一つの文字を見つめていられない。じきに頭がぼうっとなってきた。ぼくは瞼を押さえ、輪郭が二重になって見える部屋の中をまた見まわした。

顔の大きい四十男一人と、身装ばかり派手なオールドミス五人が、石油ストーブをはさんでぼくと対峙している。本当はぼくたちは輪になって腰かけているのだけれど、状況はそうだ。さっきから連中がどんなに顔に皺をきざんで笑いかけ、ねこなで声で話しかけたってそうだ。例えばぼくの右隣りにいるトックリセーターの女のことを言ったって、やっこさんのひねこけた身体は、ストーブの方を向いているのではなくて、ぼくの横顔をまともに監視する姿勢をとっているのだから。

めいめいの足もとに、緑茶のティーバッグを入れた湯呑茶碗が直かに置かれている。湯呑茶碗の数が足りないのか、わざとそうしたのか、ぼくの足もとのだけが、とってのついた紅茶茶碗だ。さっき保護司夫婦がポットを持ってくるからと言って部屋を出ていったきり戻って来ないので、茶碗の中は乾いている。

「札幌のおふくろさんのことも、きょうは、これ以上訊くのはよそう。しかし、そうすると君は一体何を人と話したいのかね。何か好きなものってないのかね。これなら信じられるっていうような人はいないのかね」

四万は、毛の薄い頭をストーブの方につき出すようにして、たばこの灰を茶碗に落とした。

どうも質問のピントが合っていないな。一体一度に幾つ訊きたいんですか。言い返してやろう

と思ったけれど、会話が長びくだけだと思い直してやめた。
「列車の後姿が好きですよ。傾きながらカーブを曲って行くときのね」
左隣りのチャイナ服みたいな襟の服を着た女が、とつぜんノートを開らいて筆記しはじめた。
「緒野君、担当する若者の前では、もっとリラックスなムードでいかなけりゃね」
四万が言った。女はあわててノートを閉じ、うつむいてしまった。
「気にしなくていいんだよ、清志君。彼女は実はこんど君の専任の友だちとしてつくことに決ったひとなんだ。だからつい情報集めに熱心になりすぎたんだ」
四万は、艶のいい顔を真直ぐぼくに向けて笑いかけた。
専任の友だちというのはどういう意味だ。例えば、デニムのズボンと胸ポケットのハンカチだけが真新しい北海道なまりの若者は、使い古しのショルダーバッグ一つをぶら下げて上野駅の広小路口に出てきた若者は、それだけでもうひどく孤独な存在だったなどと、本気でこの連中は考えているのだろうか。あの家庭裁判所の係官が、ぼくを釈放するときにいかにも訳知り顔に言ったように、この街では孤独はそのまま反社会的な脱落者への道につながるのだ、などという不潔な危機感を、ここでも押し売りするつもりなのだろうか。ぼくのしでかしたあの行為が、その行為の責任が、半分はぼくではなくてこの都市の仕組み自体にあるなどという同情心を、本気で押し売りするつもりなのだろうか。孤独は被害なのだと本気で信じているのだろうか。
誰も専任の友だちなんて注文しやしませんよ。年上の情婦を紹介してくれるとでも言うなら別

ですけどね。そう言って五人の女たちの膝こぞうをなでまわしてやりたい衝動をこらえていた。そうして、けっきょくぼくの口にした言葉といったらこうなのだ。ちょっと表へ買物に行ってきていいですか。コーヒー牛乳かなんか飲みたいんです。あんまり喋りすぎちゃって、喉がかわいてしょうがねえや——

四万は一瞬むっとして何か言い返そうとした。いや、むっとした表情はすぐに苦笑の皺の中に埋まってしまった。左隣りの詰襟のワンピースの女が急にくすりと笑いだした。ストーブの方に真直ぐ身体を向けていて、彼女だけがさっきから一度もぼくと視線を合わせていない。笑い声を、ぼくは、彼女と腕の皮膚が触れ合いでもしたような親しさで聞いた。

黒板の横にあるドアが開いた。はげ頭だが四万より更にひとまわり恰幅のいい保護司の飯塚が、スリッパを引きずって入ってきた。

「……それじゃ、清志君も初めての顔合わせで疲れているようだし、あとは必要最小限のことだけ話し合っておひらきにしよう」

四万が、眼鏡の奥から媚びた視線で保護司を見上げ、すばやくその目を女性会員たちに移しながら言った。ぼくの右隣りの女から詰襟の女へ視線を移すとき、ぼくははっきりと観察していたけれど、奴の視線は、ねずみの屍骸が浮かんだ下水溝でもとびこえるように通りすぎた。

せっかくだから皆で夕食をしてゆきたまえ、店屋もので悪いが何かとるから。保護司が言った。清志君はどんなものが好きだい。四万が言った。お茶の出前を七つっていうのはどうですか。口

まで出かかった言葉を歯でかみながらぼくは黙っていた。
ぼくが受け答えすることを止めてしまったので、あとは女性会員たちだけのばかばかしい雑談になった。保護観察期間には幾つかの自由の制限があって、例えば毎月一回指定される日に、保護司の面接を受けに来なければならないことになっている。が、何時間拘束されなければならないという規定までは無いはずだった。五人の女性会員どもが多数決で決めた味噌ラーメンの出前が届けられたのをしおにぼくは立ちあがった。保護司と四万は、いかにもおうような態度で、まあおいおいに馴れなさいと言っただけだった。
「先生、私、清志君を送って帰ります。途中まで電車で一緒に行けますから」
部屋の隅に立てかけてあった傘の中から自分のを探していると、ふいに専任の友だち女史が言った。
いつの間に残業が終ったのか、作業場にはもう工員たちの姿はなかった。とうとうポットを持って来なかった保護司の細君が案内して開けてくれたくぐり戸から外に出た。雨は、傘をさそうかどうしようかと一瞬ためらうていどの小降りになっていた。
「近道があるのよ……」
並んで歩きだすとぼくより五センチは背が低い専任の友だち女史が、片手でコートの襟を立てながら言った。
背の方から吹いてくる風が冷たかった。

「十一月ねえ」
ぎごちない言い方だった。ヘッドライトの光をぶつけながら、小型トラックがすれ違って行った。タイヤが舗道の雨滴を踏みつぶす音が、道の片側の倉庫会社のコンクリート塀にはね返った。雨の日は臭いがこもる。積み荷の鉄材の臭いが、しばらくぼくたちの身体の周囲につきまとった。
ガラス店のくず捨場の角からわき道に入ると、二人傘をさして並んでは歩けなくなった。
「清志君の傘に入れてもらおうかな」
ふり向いて彼女が言った。また右の眼が痛くなりだした。曲りくねった狭い道の両側は倉庫みたいなのっぺらぼうな建物か木造の長屋の玄関ばかり。その間に、ときどき不釣合いなネオン看板を出した美容院やお茶漬け屋などが点々とはさまっている。
「ねえ清志君、どうしてきみ、お母さんのこと言いたがらないの」
傘を支えている肱を、彼女の厚い胸のわきにわざと押しつけてやりながら、ぼくはさっきと同じ答えをした。彼女が少し歩を速めた。細い道の前方に、××旅荘と書いた看板と明るい大通りの一部が見えはじめた。
ぼくたちより十メートルほど前を、旅荘の看板の下から出てきた背の低い男女が歩きだした。革コートを着た女は二度立ちどまって靴を直した。大通りに出たところでようやく連中に追いついた。女は男にかるく頭を下げて、そのまま通りを歩いて行った。中学の時の英語教師に身体つきがよく似た男は、ガードレールをまたいで車道に出、走ってくるタクシーに向って勢いよく手

を振りまわした。
「ぼくろの手術をして取ってしまったのよ。今では惜しいことをしたと思うの」
「……」
「だって、瞼におおいかぶさっているぼくろって、金運を運んでくるんですってね」
ぼくが答えないせいだろうか。彼女はまた少し足を速めた。
くすんだ街灯の光が水面を照らしている狭い運河の橋を渡った。水は黒ずんでいて少なかった。ビニールくずみたいなかたまりが石垣に付着してい、その上に茶色い猫が一匹のっかっていた。

義務としてぼくはそこにいた。十二時きっかりという約束に、わざと二十分遅れて来たからだった。ひょっとして緒野充子はもう帰ってしまったかもしれない。帰ってあのはげ頭の保護司かスーパーバイザーの四万に告げ口をしているかもしれない。眼下の雑沓をはさんで、上野駅のプラットホームが見える。日曜日だというのに、ホームはいっぱいの人混みだった。どこか遠い所からのもののようにしか聞こえない自動車の音をバックに、そいつらなぜか能役者みたいに足裏をホームにこすりつけてゆっくりと歩いている。
じっと見ていると、人混みはじょじょに数を増してくる。ホームや道路のスペースは変らないのに人間ばかりとめどなく増えつづけるものだから、ふと、あいつらみんな地べたから湧き上っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com